古田武彦の業績に基づく論点整理

そうだったのか「倭国から日本国へ」

大越　邦生

八王子の古代史セミナーでの発表は今回で４回目となる。本発表の目的は、セミナー参加者に古田武彦の業績を短くまとめ、議論を深めるための話題を提供することにある。そのため、古田の古代史を「見える化」し、わかりやすく論点を整理するよう心掛けてきた。

過去３年間に発表した内容は以下の通りである。

①邪馬壹国と卑弥呼(2020)、②倭国と倭の五王(2021)、③倭国と多利思北孤(2022)

今回の主題は「倭国から日本国へ」。対象となる中国史書は『旧唐書』である。

いつも通り、趣旨は、研究発表ではなく「古田武彦の業績に基づく論点整理」である。

今回のプレゼンは以下の方針で作製した。

1. 「倭国と日本国は、同一国か？別国か？」を明らかにする

『旧唐書』東夷伝は、「高麗」「百済」「新羅」「倭国」「日本」の５国で構成されている。この「倭国」と「日本」を、通説では「同一国の国名変更」と理解する（例えば、岩波『旧唐書倭国日本伝』では、「倭国と日本を併記するような不体裁」と解説している）。一方、『旧唐書』日本伝冒頭には、「倭国」と「日本」は別国だと明記されている。この相矛盾する、倭国・日本「同一国説」、「別国説」への疑問を中核に据えてプレゼンを構成した。

2. 「白江の戦」を中心に据えた展開

今回は、「卑弥呼」や「日出づる処の天子」のような主要人物は登場しない。表題通り、「倭国から日本国へ」の権力移行が主題となる。これをどう可視化するかが課題となる。結論、「白江の戦」を中核に据えた構成を考えた。古田武彦は「倭国の白江戦での敗戦」こそが「倭国から日本国へ」の移行の原因と捉える。その戦を視覚化することで、セミナー参加者が「倭国から日本国へ」の主題に、より迫れるのではないかと考えた。

戦争名は『旧唐書』では「白江戦」、『日本書紀』では「白村江の戦」と表記されている。プレゼンでは、扱う史書ごとに呼び方を使い分けた。

なお、「劉仁軌の上表文」（『旧唐書』劉仁軌伝）をプレゼンに加えた。白江戦後、劉仁軌が百済の扱いについて、唐帝に進言したものだ。古田の著書にはないが、倭国に派遣された郭務悰の「政治・軍事報告書」を考察する上で参考になるのではないか、と考えた。

※プレゼン作成においては、古田武彦の著作に基づき、できる限り自身の意見を交えないよう心掛けた。しかし、古田本人が自説を変更していたり、大越にどうしても内容が理解ができないような場合は、自己の判断に従った。

※今回の「論点整理」製作は、これまでになく困難な作業だった。その理由は、ひとつに、歴史的スケールが大きく、扱う内容が多岐にわたっていたこと。ふたつに、製作者本人が必ずしもそれら全てに精通していない、という事情によった。勉強しながらの作業だったので、誤りや説明不足の点が多々あったかと思う。それらすべて大越の責任である。

内　　容

序　章　『旧唐書』倭国日本伝の史料価値

第１章　『旧唐書』倭国伝

1. 『隋書』倭国伝・『旧唐書』倭国伝、記述の比較
2. 「倭国伝」歴史的由来の信憑性
3. 対等外交と朝貢外交
4. 「白江戦」とその前後

　① 百済の滅亡（『旧唐書』帝紀）

　② 「白江戦」前夜（『旧唐書』百済伝）

　③ 「白江戦」（『旧唐書』劉仁軌伝）

　④ 「白江戦」その後(1)

　　【『旧唐書』編】～〔熊津城の盟〕と〔封禅の儀〕～

第２章　『旧唐書』日本伝

1. 「倭国」と「日本国」
2. 「倭国」と「日本国」の歴史的由来
3. 「小国」の意味（『旧唐書』突厥伝）
4. 「実」と「虚」
5. 「倭国」と「日本国」の範囲

第３章　「倭国」から「日本国」へ

1. 代表王者の交代
2. 「白村江の戦」その後(2)

　　【『日本書紀』編】～戦後処理～

3. もうひとつの「白村江の敗戦」

◇　結び「世にも不思議な物語」

《参考文献》

『旧唐書倭国日本伝』（岩波文庫）

『邪馬一国への道標』古田武彦著（講談社）

『失われた九州王朝』古田武彦著（朝日新聞社）

『古代は輝いていたⅢ』古田武彦著（朝日新聞社）

『九州王朝の歴史学（第４篇）』古田武彦著（駸々堂）

『よみがえる卑弥呼（第７篇）』古田武彦著（駸々堂）

『失われた日本(第９章)』古田武彦(原書房)

『古代通史』古田武彦著（原書房）

『奪われた国歌「君が代」』古田武彦著（情報センター出版局）

《資料》

『旧唐書』倭国伝

倭国は古の倭奴国なり。京師を去ること、一万四千里。新羅の東南の大海の中に在り。山島に依りて居す。東西は五月行、南北は三月行。世に中国と通ず。其の国、居するに城郭無し。木を以て柵を為し、草を以て屋を為す。四面に小島、五十余国、皆これに附属す。

其の王、姓は阿毎氏。一大率を置きて諸国を検察し、皆之に畏附す。官を設くること、十二等有り。其の訴訟する者は、匍匐(ほふく)して前(すす)む。地に女多く、男少なし。頗(すこぶ)る文字有り。俗、仏法を敬う。並びに皆跣足(せんそく)。幅布を以て其の前後を蔽う。貴人は錦帽を戴き、百姓は皆椎髻(ついけい)にして冠帯無し。婦人の衣は純色、裙(もすそ)は長くして腰に襦(じゅ)し、髪を後に束ね、銀花を佩(お)ぶること、長さ八寸、左右各(おのおの)数枝。以て貴賤の等級を明らかにす。衣服の制は頗(すこぶ)る新羅に類す。

貞観五年(631)、使いを遣わして方物を献ず。太宗、其の道の遠きを矜(あわ)れみ、所司に勅して歳貢せしめる無し。

又新州の刺史、高表仁を遣わし、節を持して往きて之を撫せしむ。表仁、綏遠(すいえん)の才無く、王子と礼を争い、朝命を宣(の)べずして還る。

二十二年(648)に至り、又新羅に附して表を奉じ、以て起居を通ず。

『旧唐書』日本伝

日本国は倭国の別種なり。其の国日辺に在るを以て、故に日本を以て名と為す。或は曰う、倭国自ら其の名の雅ならざるを悪(にく)み、改めて日本と為す。或は云う、日本は旧小国、倭国の地を併(あわ)す、と。

其の人、入朝する者、自ら矜大(きょうだい)にして実を以て対せざる、多し。故に、中国焉(これ)を疑う。

又云う、其の国界、東西南北、各数千里。西界・南界、咸(みな)大海に至り、東界・北界、大山有りて限りを為す。山外は即ち毛人の国、と。

長安三年(七〇三)、其の大臣、朝臣真人、来りて方物を貢す。朝臣真人は、猶(なお)中国の戸部尚書のごとし。進徳冠を冠り、其の頂に花を為し、分れて四散す。身は紫袍を服し、帛(はく)を以て腰帯と為す。真人、経史を読むを好み、属(しょく)文を解し、容止温雅。則天、之を麟徳殿に宴し、司膳卿を授け、放(はな)ちて本国に還らしむ。

開元(713～741)の初、又使を遣わして来朝す。因りて儒士に経を授けんことを請う。四門

助教、趙玄黙に詔し、鴻臚寺に就いて之を教えしむ。乃ち玄黙に闊幅布を遣り、以て束修の礼と為す。題して云う、白亀元年の調布、と。人亦、其の、此の題を為すかと疑う。得る所の錫寶(しらい)、尽く文籍を市(か)い、海に泛(うか)んで還る。

其の偏使、朝臣仲満、中国の風を慕い、因って留まりて去らず。姓名を改めて朝衡と為し、仕えて左補闕・儀王友を歴(へ)たり。衡、京師に留まること五十年、書籍を好み、放ちて郷に帰らしめしも、逗留して去らず。

天宝十二年(753)、又使を遣わして貢す。

上元(760～761)中、衡を擢(ぬき)んでて左散騎常侍・鎮南都護と為す。

貞元二十年(804)、使を遣わして来朝す。学生、**橘免勢**、学問僧、**空海**を留む。

元和元年(806)、日本国の使、判官、**高階真人**上言す。前件の学生、芸業稍(ようや)く成り、本国に還らんことを願う。便(すなわ)ち臣と同じく帰らんことを請う、と。之(これ)に従う。

開成四年(839)、又使を遣わして朝貢す。

『旧唐書』百済国伝

(永微六年 655)新羅王金春秋、又表して百済、高麗・靺鞨と与(とも)に、其の北界を侵し、已(すで)に三十余城を没す、と称す。

顕慶五年(660)、左衛大将軍、蘇定方、兵を統べて之を討ち、大いに其の国を破る。義慈及び太子隆、小王孝演、偽将五十八人等を虜にし、京師に送る。上、責めて之を宥す。其の国、旧、分れて五部を為し、郡三十七、城二百、戸七十六万を統ず。是に至りて乃ち其の地を以て分ちて熊津・馬韓・東明等の五都督府を置く。(中略)

百済僧道琛(どうちん)、旧将福信、衆を率いて周留城に拠り、以て叛す。使を遣わして倭国に往かしめ、故王子扶余豊を迎え、立てて王と為す。(中略)

竜朔二年(662)七月(扶余豊)又使を高麗及び倭国に往かしめ、兵を請い、以て官軍を拒む。

孫仁師、中路にして迎えて之を撃破す。遂に仁願の衆と兵士を相合し、大いに振う。

是に於て仁帥、仁願及び新羅王金法敏、陸軍を帥いて進む。劉仁軌及び別帥、杜爽・扶余隆、水軍及び糧船を率いて熊津江より白江に往き、以て陸軍に会い、同じく周留城に趨く。

仁軌、扶余豊の衆に白江の口に遇い、四戦皆捷ち、其の舟四百艘を焚く。賊衆大いに潰ゆ。扶余豊、身を脱して走り、偽王子、扶余忠勝、忠志等、士女及び倭衆を率いて並び降る。

(古田武彦 訳)

※太字部分はプレゼンで説明します。

「倭国から日本国へ」年表　(7 世紀～8 世紀初頭)

	日本列島内の動き	参　　考
倭国	600　筑紫の王者(「日出づる処の天子」)、 多利思北孤、隋(文帝)と国交 607　多利思北孤、隋(煬帝)と通交 「日出づる処の天子」の国書を贈る 隋の裴世清、倭国に来る 「この後、遂に絶つ」 630　唐に三田耜等を遣わす(紀) 631　唐の高表仁、王子と礼を争いて帰る 632　唐、高表仁を遣わす。翌年、高表仁は友好的に帰国する(紀) 645　中大兄、入鹿を斬る(紀) 648　唐との最後の国交	
		660　唐、百済王都を占領
	661　筑紫朝倉宮で斉明天皇没(紀) 662　白江の戦〔日本書紀では 663 年〕 郭務悰の来倭(4 回。天智紀 3,4,8,10 年) 664　冠位 26 階の制定(紀)	
		665　熊津城の盟(倭・百済・高句麗は残暴国) 666　封禅の儀(倭国など 4 国出席)
	672　壬申の乱(紀) 700　倭国の滅亡 筑紫都督府を中心とする「評制」の終結 九州年号の終結	
	新旧王朝の画期線	
日本国	日本国(近畿天皇家)の誕生 701　近畿を中心とする「郡制」の開始 大宝元年に改元	
		702　唐の則天武后、日本国と国交

※『古代通史』古田武彦著（原書房）の年表に基づき、一部、プレゼンで扱った内容を加えた。